

史跡 心合寺山古墳
第6次発掘調査概報

1999年3月

八尾市教育委員会文化財課



『八尾市文化財紀要9』正誤表

箇所	誤	正
P. 1 3行目	前方部を北側に、後円部が南側に	前方部を南側に、後円部が北側に
P. 14 3行目	鉄品	鉄製品
P. 16 7行目	ことわかる。	ことがわかる。

はじめに

心合寺山古墳は、八尾市域の東に連なる生駒山系の西麓に築かれた北・中河内最大の前方後円墳であります。昭和41年には、国の史跡に指定されました。

八尾市教育委員会では、この心合寺山古墳を市民の方々をはじめ、多くの人々に親しまれる場として保存整備を計るために、平成3年度から継続して基礎発掘調査を行い、史跡整備の基本構想の策定を行なうなどの準備作業を行ってまいりました。

平成9年度からは、いよいよ本体整備のための発掘調査を、文化庁の国庫補助事業として開始いたしました。その結果、心合寺山古墳の墳丘の少なくとも西側については、3段で築造されていること、墳丘長が160m以上になることが判明するなど、大きな成果を取ることができました。

そして、本年度（平成10年度）は、第6次発掘調査として、前方部及び後円部の墳頂平坦面の調査を行いました。前方部では後円部に向かって伸びる円筒埴輪列と全国的にも希な方形壇状遺構を検出し、後円部では主体部に関連すると考えられる墓壙と埋葬施設の位置・構造等を確認するという成果が得られました。本書は、これらの調査成果の概要を「八尾市文化財紀要9」としてとりまとめたものです。今後、心合寺山古墳の貴重な学術的な価値を多くの人々に知っていただく一助となれば幸いに存じます。

末筆となりましたが、発掘調査を進めるにあたりましては、地元の方々をはじめとする市民の皆様方、史跡整備委員の諸先生をはじめ、関係各位からの多大なご助力、ご指導を賜りました。心より厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

八尾市教育委員会
教育長 西谷信次

[例言]

1. 本書は、平成10年度に八尾市教育委員会が、大阪府八尾市大竹に所在する国史跡心合寺山古墳において行った史跡整備に伴う発掘調査（第6次）の概報を八尾市文化財紀要9として刊行するものである。
2. 第6次発掘調査は、八尾市教育委員会文化財課 技師 藤井淳弘が担当し、1998年7月1日着手し、同年10月30日に終了した。
3. 現地調査にあたっては、下記の心合寺山古墳史跡整備委員の御指導をいただいた。

村川行弘 大阪経済法科大学 総合科学研究所長 教養学部 教授
堅田 直 帝塚山大学 名誉教授
和田晴吾 立命館大学 文学部教授
井藤 徹 (財)大阪府文化財調査研究センター 調査部長
加藤允彦 奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター 保存工学研究室長
(順不同・敬称略)

4. 現地調査及び本書の作成にあたっては、下記の諸氏の参加・協力を得た。
調査作業員) 井上尚樹・川村一吉・佐々木重紀・芝山和夫・下山保・成哲・竹田正孝
辻理・西仲茂・松本弘・山口修・山本音次郎・吉岡秋夫
調査補助員) 明石信行・加茂靖通・島田拓・関真一・高橋尚子・灰藤秀樹・日高智隆
福田絵里子・藤中貴子・藤戻勝則・松尾実・山本陵子・横山妙子
5. 第4章に奥田尚氏（八尾市立曙川小学校教諭）から玉稿を賜った。記して感謝の意を表します。
6. 本書の執筆・編集は藤井が行った。

[目次]

第1章	調査の目的と経過	1
	1. 心合寺山古墳の歴史的環境と既往の調査	1
	2. 今回の調査の経過	2
第2章	第6次発掘調査の概要	4
	1. 前方部の調査概要	4
	2. 後円部の調査概要	10
第3章	埴輪列と方形壇状遺構について	16
第4章	「心合寺山古墳の葺石の石種とその採取地」 奥田 尚	18
第5章	小結	21

[掲 図 目 次]

第1図	心合寺山古墳周辺図 (1/8000)	1
第2図	調査区設定図 (1/1000)	3
第3図	埴輪列・方形壇状遺構 検出状況模式図 (1/250)	7
第4図	墓壙及び埋葬施設の位置 (1/125)	12
第5図	墳丘主軸と埴輪列の復元 (1/500)	16
第6図	方形壇状遺構の石種 (1/50)	20

[写 真 図 版 目 次]

写真1	前方部から後円部を望む (調査前)	2
写真2	後円部から前方部を望む (調査前)	2
写真3	電気探査風景 (その1)	2
写真4	電気探査風景 (その2)	2
写真5	前方部調査区を上空より望む (東から)	4
写真6	前方部 調査風景 (その1)	5
写真7	前方部 調査風景 (その2)	5
写真8	埴輪列 検出状況 (その1)	5
写真9	埴輪列 検出状況 (その2)	5
写真10	埴輪列 検出状況 (その3)	7
写真11	埴輪列 検出状況 (その4)	7
写真12	大型円筒埴輪と蓋形埴輪	7
写真13	蓋形埴輪立ち飾り 出土状況	7
写真14	埴輪列検出状況 (その5)	8
写真15	方形壇状遺構 検出状況 (その1)	8
写真16	前方部平坦面 遠景	9
写真17	方形壇状遺構 検出状況 (その2)	9
写真18	方形壇状遺構 調査風景	9
写真19	方形壇状遺構 土師器 出土状況	9
写真20	心合寺山古墳を上空より望む (北から)	10
写真21	後円部 調査風景 (その1)	11
写真22	墳頂にあったコンクリート基礎 (北から)	11
写真23	墳頂にあったコンクリート基礎 (南から)	11
写真24	コンクリート基礎内 調査風景	11
写真25	コンクリート基礎内土坑 完掘状況	11
写真26	後円部埴輪集積 出土状況	11
写真27	後円部 調査風景 (その2)	13

写真 28	検出した墓壙の一部（北東部分）	13
写真 29	攪乱土坑 2 と埋葬施設（南西から）	13
写真 30	攪乱土坑 2 と埋葬施設（北西から）	13
写真 31	攪乱土坑 1 の北壁の状況（南西から）	13
写真 32	北壁の小砾の集積	13
写真 33	3 基の埋葬施設（南から）	14
写真 34	墓壙と埋葬施設（南から）	15
写真 35	墓壙と埋葬施設（北部分・西から）	15
写真 36	中央櫛と西櫛の北半分（南から）	15
写真 37	3 基の埋葬施設の南部分（西から）	15

[表 目 次]

第1表	石材の石種と粒径	19
-----	----------	----

第1章 調査の目的と経過

1. 心合寺山古墳の歴史的環境と既往の調査

大阪府八尾市大竹に所在する心合寺山古墳は、全長約160mの前方後円墳である。八尾市域の北東部の生駒山地西麓の扇状地先端部に位置している。南北方向に墳丘主軸を揃え、前方部が北側に、後円部が南側になり、西下がりの緩やかな傾斜地に造営されている。現況では、2段築成の墳丘であるが、平成9年度の西側くびれ部の発掘調査により、墳丘西側部分に関しては、3段築成になることが明らかになっている〔八尾市教育委員会1998〕。古墳の築造された時期は、古墳時代中期と考えられ、この時期の中河内周辺を代表する有力首長墓である。

当古墳の近隣東方の山麓側には、西ノ山古墳、花岡山古墳、向山古墳といった心合寺山古墳よりも前代の前方後円墳（古墳時代前期）が分布している。また、西方には鏡塚古墳、南東部には愛宕塚古墳といった心合寺山古墳の後の時代（古墳時代中期～後期末）の古墳も周辺に分布している〔八尾市史編集委員会1988〕。心合寺山古墳を中心としたこの地域では、特に古墳時代前期から中期にかけて前方後円墳が築造され続けており、これらを含めて『楽音寺・大竹古墳群』が形成されている〔第1図 参照〕。

心合寺山古墳は、北河内及び中河内地域を含めて、最大の前方後円墳である。そして、昭和41年2月には、国の史跡に指定された。平成4年度からは、八尾市教育委員会により史跡整備のための墳丘及び周濠部分の発掘調査が開始された。平成9年度までに5次にわたる調査が行われ、心合寺山古墳の保存・活用を目的として史跡整備にむけた古墳の基礎資料が得られている。また、それ以前にも古墳及びその周辺域が、市教委、(財)八尾市文化財調査研究会により調査が行われている。これらの発掘調査の経緯・成果は、基礎発掘調査報告書〔八尾市教育委員会1996〕や第5次発掘調査概報〔八尾市教育委員会1998〕に詳しくまとめられている。



第1図 心合寺山古墳周辺図 (1/8000)

2. 今回の調査の経過

平成10年度は、心合寺山古墳の第6次発掘調査として、前方部及び後円部墳頂部の平坦面について調査を行うこととなった〔写真1・2〕。調査は、埴輪列及び埋葬施設の位置等の確認を目的とした。調査面積は、約510m²を測る〔第2図 参照〕。

第6次発掘調査は、発掘調査に先立ち、予備調査として八尾市史跡整備委員である堅田直教授のご指導により電気探査を実施した〔写真3・4〕。墳丘平坦面を中心にしてほぼ墳丘全域にわたって探査を行い、墳丘下1m～3mの状況等についての把握を目的とした。

発掘調査は、1998年7月1日から開始し、埋め戻し等を含めて10月30日までの約4ヶ月間行った。そして、後円部から調査を開始し、また前方部についてもほぼ同時併行で調査を行った。

前方部平坦面では、第1次調査〔八尾市教育委員会1988〕で検出した前方部端部の南北方向及び東西方向の埴輪列の延長となる、後円部へと続く南北方向の埴輪列を約30m（約95個体）にもわたって検出した。その埴輪列の内側には葺石による方形壇状遺構の一部を検出し、前方部の役割を考える上で貴重な資料となった。

後円部墳頂部の西側には、近現代に建てられたコンクリートの基礎による建物（小屋）があり、またその内側には約2.5m四方の大きな攪乱坑があるなど、墳丘面はかなりの攪乱・削平を受けており、埴輪列等の遺構は検出できなかった。しかし、地表下約0.6～0.7m付近において、東西方向に並んだ粘土棒状の埋葬施設を3基確認した。また、それに伴う墓壙を確認している。

そして、9月26日には現地説明会を行い、小雨の中、約230名の参加者を得た。



写真1 前方部から後円部を望む（調査前）



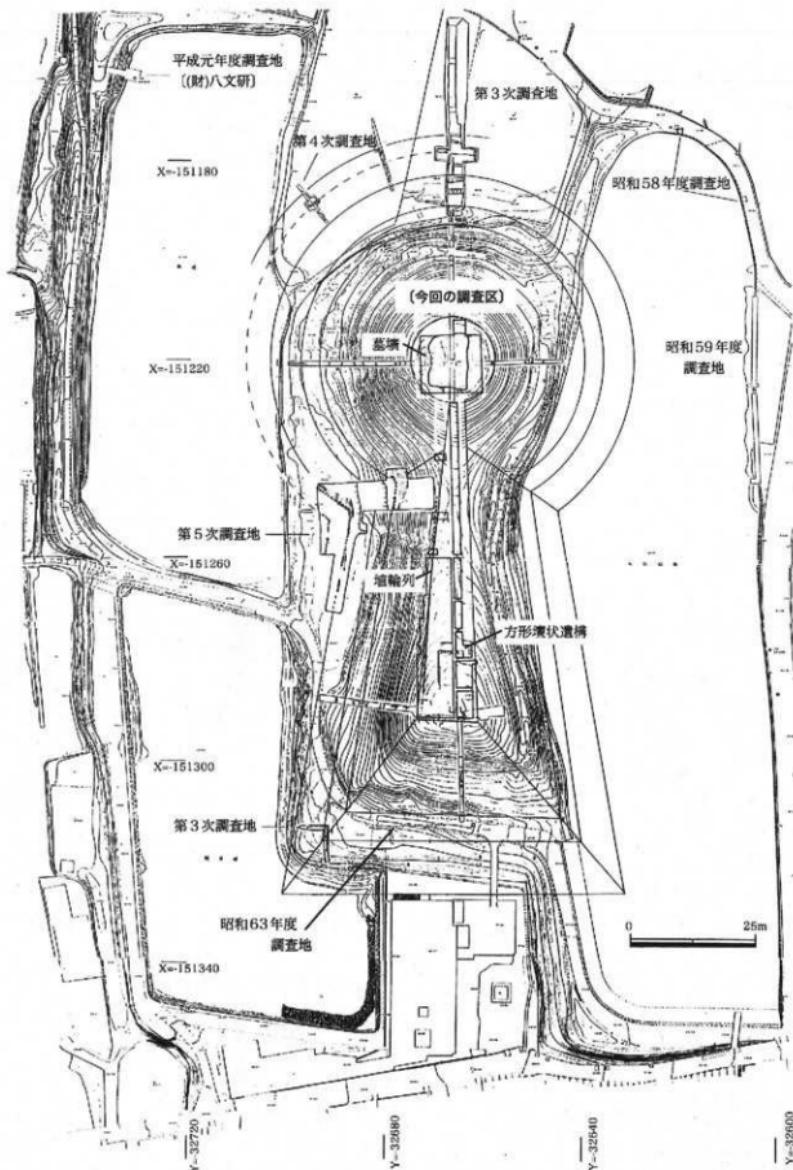
写真2 後円部から前方部を望む（調査前）



写真3 電気探査風景（その1）



写真4 電気探査風景（その2）



第2図 調査区設定図 (1/1000)

第2章 第6次発掘調査の概要

1. 前方部の調査概要

前方部墳頂平坦面の墳丘中軸想定ラインから主に西側部分を中心にして、約360mの範囲で調査を行った。第1次調査で検出した埴輪列の延長とその内側の状況について明らかにすることを目的とした。また、埴輪列の延長を確認するために3ヵ所の拡張区を設定した（南より「a区」、「b区」、「c区」と呼称）。

そして、現地表面から約0.3~0.4m前後で、平坦面の南西端部から西側にかけて、南北方向の埴輪列を検出し、その内側中央部では方形壇状遺構の一部を検出した。しかし、平坦面の東側については、特に畠地として使用されるなど後世の利用等により擾乱が激しいために、墳丘が大きく削平されていた。そのため、今回の調査でも方形壇状遺構の東側・南側部分及び東側の埴輪列等は確認できなかった。さらに、流入土中や埴輪列付近から土師器、黒色土器、瓦、瓦器等の破片は少量ながら出土しているものの、「心合寺」跡関連や後世の古墳利用を示す遺構等は検出できなかった。

1) 南北埴輪列 [写真5~14]

埴輪列について： 前方部墳頂平坦面は、端部に並べられた円筒埴輪により区画されていることが明らかになった。今回検出した平坦面西側の埴輪列は、第1次調査で検出した平坦面南端の東西方向の埴輪列が西端で屈曲したのち、南北方向に続く。前方部から後円部に向かって続くもので、今回の検出長は約30mにわたる。

この埴輪列は、拡張区のa区までは検出しているものの、b区・c区以降では墳丘の削平が



著しい。そのため、b区では1個体分の円筒埴輪の基底部の一部のみが残り、c区では検出できなかった。前方部平坦面から後円部墳頂平坦面へと埴輪列が続く可能性は高いものの、今回の調査では明らかにできなかった。

前方部平坦面においては、今回調査範囲外となった東側の埴輪列を想定すると、平坦面に沿って台形状に円筒埴輪が並べられていたことが予想される。

写真5 前方部調査区を上空より望む（東から）

出土状況について： 個体数にして約95個体の円筒埴輪のほとんどが原位置を保ち、近接して並べられていた。埴輪の基底部と最下段は残存していたものが多い。平坦面南端では、埴丘の西側斜面方向に、ほとんどが倒れ込んでおり、さらに埴輪の掘り方の埋土等は流出していた〔写真11〕。ただし、後円部側（北方）に行くにつれて、埴輪はほぼ直立した状態で出土している。一部掘り方も確認している。

そして、前方部端の東西埴輪列から今回検出した北端の円筒埴輪までの比高差は、約2mを測り、前方部平坦面は後円部に向かって緩やかなスロープ状に下がっていくことがわかる。

埴輪配列について： 埴輪列中には、円筒埴輪以外に朝顔形埴輪を配置していたことが明らかになった。また、埴輪列内側に朝顔形埴輪の笠部が転落しているのが見られた。その配列を復元すると、約10本の円筒埴輪を並べるごとに朝顔形埴輪を一本置く。そして、円筒埴輪を1本～2本はさんでさらに朝顔形埴輪を一本置いていたと考えられる。ただし、円筒埴輪と朝顔形埴輪との詳しい配置の規則性については、今後の検討が必要である。また、壺形埴輪の配置については、明らかにできなかった。

さらに、埴輪列の外側には、列中で使用されている円筒埴輪よりも大型の円筒埴輪（直径約30cm以上：口縁部に貼付突帯を持つ）を約4.5mおきに配置している。その近辺から蓋形埴輪の笠部や立ち築りの破片等が出土していることから〔写真12〕、この円筒埴輪の上部には、蓋形埴輪が載せられていたと考えられる。

前方部平坦面の埴輪列中及びその内側には、蓋形埴輪以外の盾形・家形等その他の形象埴輪の破片は確認できず、これらの使用状況は明らかにできなかった。



写真6 前方部調査風景（その1）



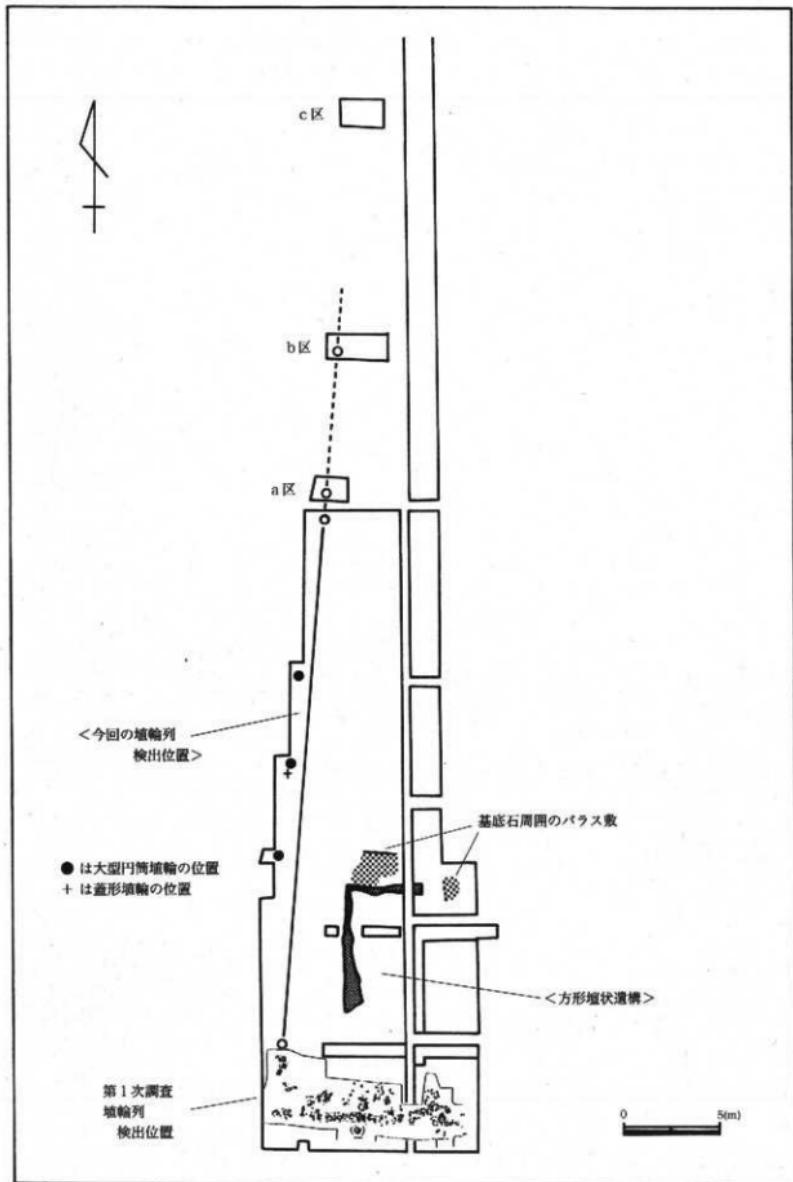
写真7 前方部調査風景（その2）



写真8 埴輪列検出状況（その1）



写真9 埴輪列検出状況（その2）



第3図 埴輪列・方形壇状遺構検出状況模式図（1/250）



写真10 増輪列検出状況（その3）



写真11 増輪列検出状況（その4）



写真12 大型円筒埴輪と蓋形埴輪



写真13 蓋形埴輪立ち飾り出土状況

また、増輪列の内側には、方形壇状造構があり、またそれを囲む方形区画等による新たな増輪列は確認できなかった。

円筒埴輪について： 今回検出した南北増輪列では、直径約20cm前後の円筒埴輪が主に使用されていた。また、一部の埴輪の外面に赤色顔料を塗布していた痕跡を確認している。なお、今回出土した埴輪については、現在整理段階にあるため、一部の特徴的なものについての記述になる。

個体差はあるものの外面調整は、ほとんどがB種ヨコハケを主体としており、一部にタテハケのみのものが見られる。焼成は、黒斑が見られ、野焼きである。スカシは、円形を基本としているが、方形、半円形のものが一部存在する。タガについては、ほとんどの円筒埴輪が台形状もしくはやや偏平な台形状を呈しているが、わずかに突出した方形のタガを持つものが見られた。器高については、不明であるが、少なくとも三条以上の突帯を持つ。

これらの特徴から、心合寺山古墳の前方部墳頂平坦面で使用された円筒埴輪は、既往の調査と同様に川西編年のⅢ期であることがわかる。

形象埴輪について： 前方部平坦面の形象埴輪で内容が明らかな蓋形埴輪については、その立ち飾り部分の飾り板の文様に、無紋のものと線刻を施すもの【写真13】との2種類があることがわかっている。また、蓋の笠部に関しては、既往の調査では笠縁に線刻等を施すものを確認しているが、今回の調査ではこれまでのところ無紋のものしか確認できなかった。



写真14 塗輪列検出状況（その5）



写真15 方形壇状遺構 検出状況（その1）

2) 方形壇状遺構 [写真15～19]

規模と特徴： 前方部平坦面の南端は中央部の埴輪列の内側で検出した葺石による低い方形の壇状遺構である。検出した部分は、北西コーナー部分の南北約6m、東西約3.7mにかけての基底石と葺石である（基底石の大きさは約0.2m前後）。

南側及び東側部分に関しては、後世の削平により失われている。後円部に向かって基底石も緩やかに傾斜していく。上部に関してもほとんどが削平を受けており、残存高は、約0.2～0.3mのみである。また、この基底石の北側を中心とした周囲には、約10cm弱の小礫が疊状に約1m幅で見られた。本来は基底石の四方に敷かれていたものと考えられる。これらの基底石及び葺石の石種については、第4章の奥田尚氏による分析の結果を参照されたい。

本来の大きさ、高さは不明であるが、おそらく、南北約7m、東西約5mの規模となると考えられる。基底石北端と南端との比高差は、約0.8mあった。高さは、基底石と葺石の角度から現況から1m以上の高さではなく、低壇状のものであったと考えられる。

出土遺物について： 基底石裾では、壇上から転落したと思われる布留式土器の壺の体部片が出土している〔写真19〕。また、南側周辺では、二重口縁壺の口縁部が出土している。その他には、少量ながら埴輪片や土師器片が出土している。これらの遺物は、原位置を保つものではなかったものの、本来は壇上において使用されていた可能性が高い。

方形壇状遺構の下層： 南北及び東西方向に約0.6m幅のトレンチで地表下0.7m～1.5m付近まで調査を行ったが、埋葬施設等の存在を示す土層の変化は見られず、また下層中に埴輪等の遺物を含む土層は確認できなかった。



写真16 前方部平坦面遠景



写真17 方形壇状遺構検出状況（その2）



写真18 方形壇状遺構調査風景



写真19 方形壇状遺構土師器出土状況

2. 後円部の調査概要

今回の調査では、後円部墳頂平坦面中央部を中心にして、一辺約12m四方の調査区と北側に2.5m×3mの拡張区を設定した。調査面積は約150m²を測る [写真20]。

後円部墳頂平坦面の西方には、調査以前から一辺約4.5m四方、幅0.3mのコンクリート基礎の上面が露出しており、納屋等の建物が建てられていたようである [写真22・23]。そして、前方部のような埴輪列は検出できず、流入土中にも埴輪片はわずかであった。後円部墳頂平坦面に関しては、かなりの削平・整地等が行われていた可能性が高い。

このコンクリート基礎の内側には、隅丸方形状の土坑（「搅乱土坑1」と呼称：写真24・25）が掘られていた。この壁面の土層観察によって、朱の付着する小礫が北壁東隅の上部で確認できた。さらに、地表下0.6m～0.7mにおいて墓壙のラインを検出しており、その範囲は、南北約11m、東西約8mであった。心合寺山古墳の埋葬施設に関しては、長持形石棺片の存在 [八尾市教育委員会 1996] から竪穴式石室を想定されていたが、今回の調査で、東西方向に並ぶ3基の粘土櫛状の埋葬施設であることが明らかとなった。

1) 後円部平坦面の状況 [写真20～26]

搅乱の状況： 平坦面の中央部西側のコンクリート基礎の建物 [写真22・23] は、昭和時代以降に建てられ、納屋等に使用されていたものである。心合寺山古墳の墳丘が、畠地として使用されていた時期のものであろう。一辺4.5m、基礎深0.5mで平坦面西側のかなりの範囲を占めていた。その内側に掘られた隅丸方形状の土坑 [写真24・25] は、一辺約2.5m、深さ約1.9mの規模で、この建物に関連するものと考えられる。位置から考えて埋葬施設を破壊していることが予想された。埴輪・土師器・瓦・陶磁器・ガラス製品等の破片が埋土から出土



写真20 心合寺山古墳を上空より望む（北から）

しているが、埋葬施設に関連するような遺物は確認できなかつた。

さらに、江戸時代頃に後円部にあったとされる観音堂に関連する遺構や古墳造営後の墳丘の利用をうかがえるような遺構等は検出できなかつた。

埋葬施設の確認面までが非常に浅いことから、本来の墳丘面はかなりの削平・搅乱を受けていることが予想された。

墳頂平坦面の埴輪：後円部墳頂平坦面では、かなりの削平・攪乱が行われており、主体部を囲む埴輪列等は検出できなかった。また、平坦面の外周を囲む埴輪列も確認できなかった。

さらに、円筒埴輪及び形象埴輪の出土量そのものが少なく、原位置を保つ埴輪も確認できなかった。但し、平坦面北端の拡張区において、円筒埴輪と家形埴輪の破片と礫の集積を検出している〔写真26〕。おそらく、平坦面の整地時に集められたものと考えられる。

墳頂平坦面の埴輪の構成を知る上では、これらの資料を含めて少なくとも、円筒埴輪、朝顔形埴輪以外に、家形埴輪、甲冑形埴輪、盾形?埴輪などの形象埴輪が出土しており、これらの使用状況等が、想定できる。



写真21 後円部調査風景（その1）



写真22 墳頂にあったコンクリート基礎（北から）



写真23 墳頂にあったコンクリート基礎（南から）



写真24 コンクリート基礎内調査風景



写真25 コンクリート基礎内土坑完掘状況



写真26 後円部埴輪集積出土状況

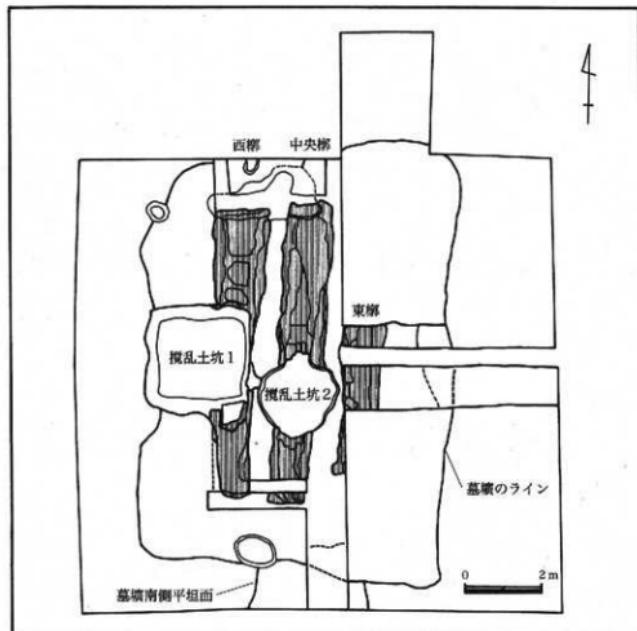
2) 墓壙と埋葬施設 [第4図・写真27~37]

墓壙の検出面： 後円部墳頂平坦面の本来の墳丘面は、前項でみたようにかなりの攪乱・削平を受けており、埋葬施設の位置を示すような埴輪列による方形区画等の痕跡は検出できなかつた。そのため、後円部墳頂平坦面の墳丘検出面が、今回の墓壙検出面となつた。この墓壙検出面は、現況地表面から地表下約0.6m~0.7mの深さで確認できた〔写真28〕。さらに、この検出面で一部攪乱等により埋葬施設の上面を確認している。

墓壙の規模： 検出した墓壙の規模は、南北約11m、東西約8mの隅丸方形状であった。この長方形の掘り方のラインは、ほとんど攪乱を受けずに残つてゐた。墓壙に重複した切り合ひ等は確認できず、おそらく一度の掘削により掘られたものと考えられる。但し、埋葬施設の時期差や構築順序の検討が必要となろう。この墓壙検出面で、埋葬施設の上面の一部が確認できたため、本来の墓壙の掘り込み面の高さ、その規模等については不明である。

また、墓壙南側中央では、墓壙に接するハの字状に開く平坦面（「墓壙南側平坦面」と呼称）を確認しており、この平坦面の性格については検討が必要であるが、前方部平坦面から後円部墳頂平坦面につながる部分になると考えられる。

埋葬施設の攪乱状況： 墓壙検出面で埋葬施設の一部が確認できたのは、後円部平坦面がかなりの攪乱・削平を受けていたためである。そして、確認した3基の埋葬施設のうち、特に中央と西側については、大きく破壊されていた。中央の埋葬施設のほぼ中心部には、直径約2m



第4図 墓壙及び埋葬施設の位置 (1/125)

大の土坑（「攪乱土坑2」と呼称：写真29・30）があり、埋葬施設を南北に分断している。特に埋葬施設の北側に向かって一部が攪乱されている。この埋土からは、土師皿、土師器の細片に混じって、形状の不明な鉄製品の破片数点が出土している。この攪乱土坑2の時期については、攪乱土坑1よりも古く、中世以降のものであると考えられる。

そして、コンクリート基礎内にあった攪乱土坑1は、ちょうど西側埋葬施設の中央部分を大きく破壊していた〔写真31〕。また、この攪乱土坑1の南側には、攪乱土坑1に先行する時期と考えられる小土坑（推定直径約0.8m）があり、西側埋葬施設の南部分を破壊している。遺物等は確認できなかった。



写真27 後円部調査風景（その2）



写真28 検出した墓壙の一部（北東部分）



写真29 攪乱土坑2と埋葬施設（南西から）



写真30 攪乱土坑2と埋葬施設（北西から）



写真31 攪乱土坑1の北壁の状況（南西から）



写真32 北壁の小砾の集積

搅乱土坑1壁面の土層観察： 搅乱土坑1の壁面の土層観察により、墓壇及び西側埋葬施設の埋土の状況等が観察できた。北壁の東隅部では、約0.35cm幅で、約3～5cm大の小礫の集中している部分が見られ、わずかながら赤色顔料が付着していた。さらにその両側には鉄品の一部が確認できた〔写真31・32〕。但し、この壁面に対応すると考えられる南壁では、小土坑により搅乱されているものの北壁のような小礫群は確認できなかった。

さらに、この搅乱土坑1の土層観察により、上面の埋葬施設に関連する以下の層は、それぞれ四方の壁面すべてに墳丘構築土（盛土）が確認でき、さらに統いていくことがわかった。このことから、地表下0.7m前後で確認した3基の埋葬施設の下層には、他の埋葬施設等が存在しないと考えられる。

埋葬施設の位置： 今回検出した墓壇内において、位置を確認できたのは、被覆粘土に覆われた3基の埋葬施設（粘土櫛）である〔第4図 及び 写真33～37 参照〕。その位置は、検出した墓坑内のほぼ中央にあり、南北方向を長軸辺に3基が平行して並んでいる（「中央櫛」・「西櫛」・「東櫛」と呼称）。その長軸方向の傾きは、磁北よりもやや東に傾いている。埋葬施設のそれぞれの距離は、ほぼ等間隔にあり、約0.5m離れている。これら位置関係から、3基の埋葬施設は計画的に配置されたことが考えられる。

後円部墳頂平坦面の中心点： 仮に3基の埋葬施設のうち、中央部の粘土櫛（中央櫛）を中心寺山古墳の中心主体とすると、中央櫛は、これまで想定していた墳頂平坦面の中心点よりもやや東に位置していることになる。今回明らかになった中央櫛の長軸辺を2等分した点が、後円部墳頂平坦面の中心点になる可能性がある。今後、墳頂平坦面の規模等の復元を含めて検討が必要となろう。



写真33 3基の埋葬施設（南から）



写真34 墓壙と埋葬施設（南から）



写真35 墓壙と埋葬施設（北部分・西から）



写真36 中央槻と西槻の北半分（南から）



写真37 3基の埋葬施設の南部分（西から）

埋葬施設の構造： 埋葬施設の位置が確認できた3基の粘土槻（中央槻・西槻・東槻）は、あくまで上面での状態・規模等が明らかになったのみで、それぞれの詳しい内容については明らかではない。そのため、これらの主体部（粘土床・棺）の構造、性格、それぞれの時期等については不明である〔写真36・37〕

しかし、埋葬施設が從来考えられていた竪穴式石室ではなく、粘土槻であることが明らかになった。それぞれ3基の粘土槻の概要について、述べていくことにしよう。

中央槻 長さ約7.5m、検出最大幅1.3mを測る。おそらく、本墳の中心主体になる可能性が高い。槻中央部を攪乱土坑2により破壊されており、槻内北側が一部攪乱を受けていた。槻内の内容については不明である。被覆粘土は、砂が多く混じる。また、槻中央西外側には短剣（槍？）が1本置かれていた。

西槻 長さ約7.3m、検出最大幅1.4mを測る。槻中央部を攪乱土坑1により大きく破壊されている。被覆粘土は、多く砂が混じり、一部被覆粘土が攪乱されていた。攪乱土坑1の壁面の土層断面の観察により、礫床である可能性が高いが、詳しいことは明らかでない。

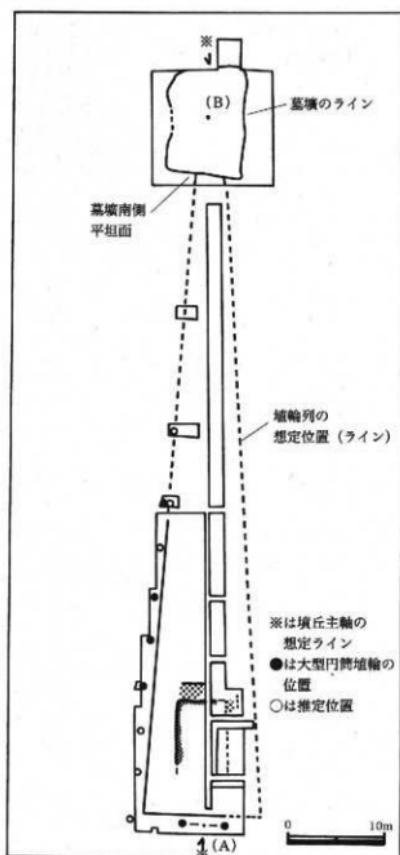
東槻 粘土槻の南側の一部を確認したのみで、規模等は不明である。推定長約5m、検出最大幅約1mを測る。3基の粘土槻のうちでは、やや小型のものになるとを考えられる。被覆粘土が大きく落ち込んでいるようである。

第3章 墳輪列と方形壇状遺構について

前方部墳頂平坦面で検出した方形壇状遺構については、全国的にも希有な例であった。その性格・意味等についての検討が必要となろう。そこで、これまで明らかになった点をもとに、若干の検討を行いたいと思う。

1) 墳丘主軸の設定 [第5図]

今回の調査で検出した前方部平坦面端部の南北埴輪列外側には、大型円筒埴輪が約4.5mおきに配置されていたことが明らかになった。これは、平坦面南端の東西埴輪列の外側で検出された特殊基部〔八尾市教育委員会1996〕ともほぼ同じ間隔であった。規格性を持って、埴輪が配置されていたことわかる。



第5図 墳丘主軸と埴輪列の復元 (1/500)

この平坦面南端の東西埴輪列外側に配置された2基の特殊基部の間のを2等分した地点を仮に「前方部頂部中央点（A）」とする。そして、後円部墳頂で確認した中央桿の中心点を「後円部墳頂中心点（B）」とする。

この前方部の（A）と後円部の（B）を結んだラインは、ほぼ南北の国土座標軸にも平行しており、心合寺山古墳の墳丘主軸に想定することができよう。

2) 墓輪列の復元

そして、南北埴輪列をこの墳丘主軸ラインで反転させて、東側の埴輪列を復元すると左図〔第5図〕のような位置に埴輪列による台形状区画になる。

さらに、この復元案では、埴輪列の延長が後円部の「墓塚南側平坦面」につながることから、前方部墳頂平坦面から後円部墳頂へと両端に円筒埴輪が並べられた平坦面が続いていく様子が復元できる。

3) 方形壇状遺構の位置

方形壇状遺構は、低壇状の施設であることは間違いないが、後世の削平が激しく、北・西側の基底石と葺石の一部のみの検出であった。その高さや上部の構造については、全く不明である。

前方部墳頂平坦面で検出した方形壇状遺構の位置は、想定した墳丘主軸ラインが方形壇状遺構北側の東西基底石（検出長約

3.7m・復元長約5m)の中央を通ることから、前方部平坦面のはば中央部に位置していることがわかった。

そして、方形壇状遺構の南側については、削平が激しいため、南北長を約7mと考えると、東西埴輪列から約3mの距離にあることになる。

このように方形壇状遺構は、前方部墳頂平坦面の位置関係から考えると、前方部から後円部に向かって並べられた埴輪列に囲まれた墳頂平坦面の南端はば中央部に位置していることになる。前方部墳頂南端の方形壇状遺構から、前方部平坦面を通り、後円部墳頂平坦面へと続いく様子が想定できよう。

4) 方形壇状遺構の類例

前方部にこのような方形壇状の遺構を確認した例は、ほとんどなく、管見したところでは、青塚古墳(愛知県犬山市) [平松1998] が発掘調査例としてあげられる。全長123mの前方後円墳で、前方部頂部の方形壇状遺構の規模は、横約9m、縦約7mで、基底石棚部には埴輪列を持つものであった。また、鎌形石製品が出土している。遺構下層の埋葬施設の有無については、不明である。

そして、調査例ではないものの、前期の前方後円墳では、西殿塚古墳(衾田陵:奈良県天理市)の前方部の方形壇があげられる。中期の前方後円墳では、誉田御廟山古墳(応神陵:大阪府藤井寺市)、百舌鳥ミサンザイ古墳(履中陵:大阪府堺市、但し円形壇の可能性がある)等の大型前方後円墳の前方部にその墳丘測量図からその存在が想定できる。

また、やや事例は異なるが、双方中円墳である櫛山古墳(奈良県天理市)では、東側の短い方形部に白磚による東西3.4m、南北5m以上の方形区画が存在し、土師器の他に石製腕飾類・土製品・鉄鎌等が出土している。

調査例については、その類例が少なく、比較検討するには今後の資料の増加を待ちたい。

5) 方形壇状遺構の性格について

方形壇状遺構は、その位置関係や出土した土器(布留式土器・二重口縁壺)や埴輪から、「心合寺」や後世の遺構とは考えにくく、古墳本来の遺構であると考えられる。そして、今回の調査では、方形壇状遺構の下層に埋葬施設の存在は確認できなかった。

これらのことから、方形壇状遺構(方形壇)が墳丘平坦面における何らかの祭祀の場所として存在していたと考えられる。心合寺山古墳においては、これまでの調査で墳丘くびれ部や墳丘周辺に「造り出し」等の施設が確認できなかったことから、前方部墳頂平坦面の方形壇状遺構がその役割を果たしていたものとは考えられないだろうか。前方後円墳における本来の前方部の果たした役割を考える上で、重要な問題となろう。

この意味では、古墳時代中期の心合寺山古墳は、造り出しの成立過程の過渡期にあたるものと思われる。今後、造り出しの有無を含めて、方形壇状遺構が、古墳時代前期からの伝統的な流れの中に存在したものか、もしくは造り出しの設置が墳丘外に困難であったという立地上の問題かは、検討が必要であろう。

下層の埋葬施設の有無を含めて、方形壇状遺構における祭祀の内容(性格)の解明や方形壇状遺構の上部構造・規模の復元など、方形壇状遺構に対する課題は多くあるが、今後の調査で明らかにしていきたいと思う。

第4章 「心合寺山古墳の葺石の石種とその採石地」

奥田 尚

心合寺山古墳の前方部上段に造られた方形壇に使用されている石材を裸眼で観察した。残存している葺石は、西北部の基礎部のみである。使用されている石材の石種はペグマタイト、粗粒黒雲母花崗岩、中粒黒雲母花崗岩、細粒黒雲母花崗岩、黒雲母閃緑岩、斑頬岩、片麻状中粒黒雲母花崗岩、片麻状細粒黒雲母花崗岩、鉱物種は石英である。各石種、鉱物種の特徴について述べる。

石種・鉱物種の特徴

ペグマタイト： 色は灰白色で、粒形が角である。石英、長石、黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2~10mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が5~10mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が5~10mm、量がごくごく僅かである。

粗粒黒雲母花崗岩： 色は灰白色で、粒形が亜角である。石英、長石、黒雲母が噛み合っている。石英は茶灰色透明、粒径が3~15mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が2~13mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1~3mm、量がごく僅かである。

中粒黒雲母花崗岩： 色は褐色で、粒形が角である。石英、長石、黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1~2mm、量が中である。長石は灰色、粒径が1~3mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5~1mm、量が僅かである。

細粒黒雲母花崗岩： 色は灰白色で、粒形が亜角である。石英、長石、黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が0.5~1mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5mm、量が多い。

黒雲母閃緑岩： 色は暗灰色で、粒形が亜角である。灰緑色で細粒の変輝緑岩のレンズがある。長径が最大6cmに及ぶ。長石、黒雲母、角閃石が噛み合っている。長石は茶灰色、粒径が2~5mm、量が多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が2~5mm、量が多い。角閃石は黒色、柱状で、粒径が1~5mm、量が僅かである。

斑頬岩： 色は灰緑色で、粒形が亜角である。長石、角閃石、輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が3~6mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が2~7mm、量が中である。輝石は暗緑色、粒径が2~6mm、量が僅かである。

片麻状中粒黒雲母花崗岩： 色は灰白色で、粒形が亜角である。顯著な片麻状をなし、黒雲母が片麻状の方向に面をなして延びる。石英、長石、黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1~3mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が1~5mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5mm、量が僅かである。

片麻状細粒黒雲母花崗岩： 色は灰白色で、粒形が亜角である。顯著な片麻状をなし、黒雲母が片麻状の方向に面をなして延びる。石英、長石、黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1~2mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が1~2mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5mm、量が僅かである。

石英： 色は灰白色、粒形が角である。

石材の使用傾向

使用されている石材の長径を10cmごとに区切ってみれば、10~19cm大のものが約半数を占める。長径が20cm以上のものは340個中の50個で、約1割5分である。石種別にみれ

ば、中粒黒雲母花崗岩が約半分を占め、片麻状中粒黒雲母花崗岩が1割5分、片麻状細粒黒雲母花崗岩や中粒黒雲母花崗岩が約1割を占める。ベグマタイト、細粒黒雲母花崗岩、石英はごくごく僅かである。

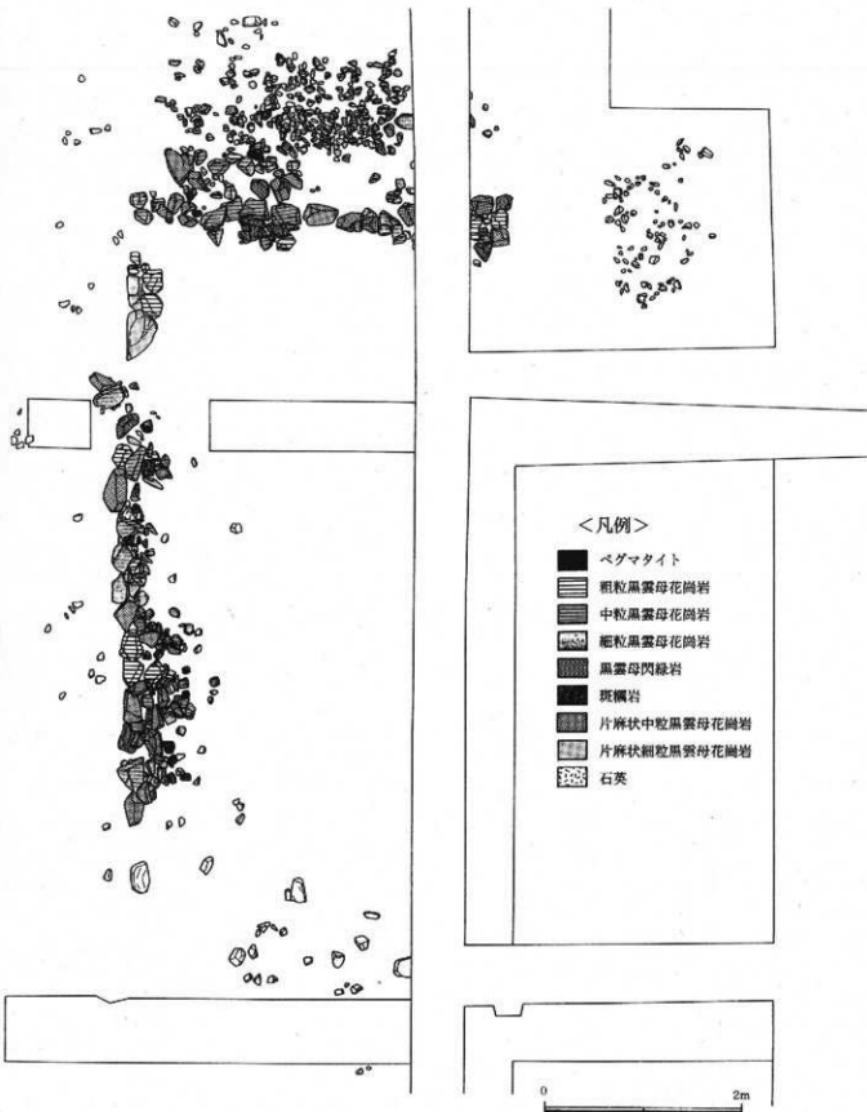
採石地について

心合寺山古墳の西方には大和川が北に流れおり、東側には生駒山地が位置する。葺石に使用されている石材は、礫形と表面様子から川原石と言うよりも、谷川に見られる礫の様相を呈することから、生駒山系から流出する礫種の分布について述べる。生駒山から恩智山にかけての岩石分布をみれば、生駒山から暗峠にかけての尾根部には斑纈岩の岩体がある。岩体の周囲を取り巻くように東大阪市綱手付近から八尾市大窪にかけて弱片麻状黒雲母花崗岩が分布する。高安山から恩智山にかけては顕著な片麻状を示す細粒黒雲母花崗岩が分布する。南方になると斑晶が顕著な片麻状黒雲母花崗岩となる。このような岩石分布の中に恩智神社の東方や一元の宮付近に閃綠岩の岩体が、楽音寺付近に斑纈岩の岩体が分布する。岩石分布の影響から、大窪付近の谷では黒雲母が多い閃綠岩や縞状をなす片麻状黒雲母花崗岩、弱片麻状黒雲母花崗岩の礫が見られる。楽音寺付近では斑纈岩や弱片麻状黒雲母花崗岩、変輝綠岩の礫が見られる。礫種の岩相と比較してみれば、片麻状細粒黒雲母花崗岩や片麻状中粒黒雲母花崗岩は高安山付近に分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部に酷似する。礫は大窪の南よりの付近でもみられる。黒雲母閃綠岩は岩相的に一元の宮付近の閃綠岩の岩相に似ている。大窪の谷にもこの礫が見られる。斑纈岩は楽音寺付近の斑纈岩の岩相の一部に似ている。粗粒黒雲母花崗岩や中粒黒雲母花崗岩、細粒黒雲母花崗岩は岩相的に暗峠から高安山にかけて分布する弱片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部に酷似する。同質の礫は神立から水越にかけての山麓で見られる。

以上のことから、葺石の石材は当古墳東方の楽音寺から大窪にかけての付近の山麓の石を採石したと推定される。

[第1表 石材の石種と粒径]

石種	cm	(個)					合 計
		5~9	10~19	20~29	30~39	50~59	
ベグマタイト			4				4
粗粒黒雲母花崗岩	11	15	7	1			34
中粒黒雲母花崗岩	65	86	6	8			165
細粒黒雲母花崗岩	2	2					4
黒雲母閃綠岩	11	11	3	3			28
斑纈岩	6	11					17
片麻状中粒黒雲母花崗岩	11	16	14	6			47
片麻状細粒黒雲母花崗岩	22	16	1		1		40
石英			1				1
合 計		128	162	31	18	1	340



第6図 方形壇状遺構の石種 (1 /50)

第5章 小 結

今回の第6次発掘調査の概要についてまとめる。

- [前方部] 1. 墳頂平坦面には、平坦面端に沿って円筒埴輪が現位置を保って出土し、おそらく、埴輪列が前方部平坦面から後円部墳頂に向かって続いていたものと思われる。その外側には、円筒埴輪の上に載せられた蓋形埴輪が一定の間隔をおいて置かれていた。心合寺山古墳の前方部平坦面の埴輪配列を復元する上で貴重な資料が得られた。
2. 墓室の内側の中央部には、方形壇状遺構（復元長：東西約5m・南北約7m）を検出した。土師器・埴輪等が出土しており、何らかの祭祀を行う場所として、使用されていた可能性が高い。
- [後円部] 1. 後円部墳頂部は、後世の攪乱が激しく、埴輪列は確認できなかったものの、家形埴輪や甲冑形埴輪等の使用状況が想定できた。
2. 埋葬施設の構造が、従来考えられていた竪穴式石室・長持形石棺ではなく、墓壙（南北約11m・東西約8m）内に東西に並んだ3基の粘土櫛であることが明らかになった。

以上のような調査成果が得られた。さらに、出土した埴輪・遺物の分析など、整理作業の過程で新たな知見を得ることができると思われる。今後の発掘調査では、心合寺山古墳の史跡整備に向けた古墳の内容の解明につながるよう引き続き、心合寺山古墳の墳丘復元や年代観等を含めて、今回確認した方形壇状遺構の性格の位置づけや埋葬施設の詳しい内容等を明らかにしていく必要があろう。

[参考文献]

- 今尾文昭 1994「大形前方後円墳・墳頂平坦面の整備と変遷」『植原考古学研究所論集第十一』
- 京都大学文学部博物館編 1993『紫金山古墳と石山古墳』
- (財)大阪府文化財センター 1976『清原得巣所蔵考古資料図録』『大阪文化誌』第6号
- (財)八尾市文化財調査研究会 1998「心合寺山古墳第2次調査(SO97-2)」
『平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』
- 田中清美 1990「造出しに関する覚え書き」『考古学論集第3集』
- 平松久和 1998「青塚古墳について」『第6回東海考古学フォーラム岐阜大会』発表要旨
- 八尾市史編集委員会編 1988「八尾市史(前近代)本文編」
- 八尾市教育委員会 1985「心合寺山古墳東側外堤2次発掘調査概要」『八尾市文化財紀要1』
1992「史跡心合寺山古墳前方部里道の発掘調査」『八尾市文化財紀要6』
1996「史跡心合寺山古墳基礎発掘調査報告書」『八尾市文化財調査報告35』
1998「史跡心合寺山古墳第5次発掘調査概報」『八尾市文化財紀要8』
- 山内紀嗣 1995「古墳の方形区画 一祭祀の変容ー」『古墳文化とその伝統』
- 和田晴吾 1998「墓壙と墳丘の出入口 一古墳祭祀の復元と発掘調査ー」『立命館大学考古学論集I』

報告書抄録

ふりがな	八尾市文化財調査報告書(古墳調査)						
書名	史跡 心合寺山古墳第6次発掘調査概報						
副書名							
巻次							
シリーズ名	八尾市文化財調査						
シリーズ番号	9						
編著者名	藤井智弘						
編集機関	八尾市教育委員会						
所在地	〒581-0003 大阪府八尾市本町1丁目1番1号 0729-91-3881						
発行年月日	西暦 1999年 3月 31日						
ふりがな 所蔵調査名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
しはれじ こみ 心合寺山古墳	おゆみ やなし 大阪府 八尾市 城北 大竹	27212	34° 38' 10"	135° 38' 40"	19980701 ~19981030	510	史跡整備
所蔵調査名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
しはれじ こみ 心合寺山古墳	古墳	古墳時代	前方部：埴輪列・方形壇状遺構 後円部：墓壙・粘土塚（3基）		埴輪・土器・瓦・鉄製品・ 弥生土器		前方部においては、平坦面端部に並べられた埴輪列を約30mにもわたり検出し、その内側には方形壇状遺構を検出した。 後円部においては、墓壙及び埋葬施設の位置を確認した。

八尾市文化財紀要 9
-史跡 心合寺山古墳第6次発掘調査概報-

発行年 1999年3月
編集・発行 八尾市教育委員会 社会教育部文化財課
八尾市本町一丁目1番1号
Tel.0729-91-3881(代表)
印 刷 旭堂印刷株式会社

<八尾市刊行物番号 H10-72>

